

学園創立者 小林清作先生の四女 田尾知子さん(高女第19回卒)が100歳に。

本学園の創立者、小林清作先生の四女、田尾知子さん(旧姓小林)が昨年の7月で満100歳を迎えました。高女在学中はテニス選手として活躍し、卒業後には極東オリンピックにも出場した往年の名選手です。現在は長女の奥山真理子さんご夫妻と穏やかに暮らしている知子さんに、高女での学校生活、清作先生、兄弟姉妹、数々のテニス大会などを振り返っていただきました。



昨年の敬老の日に、100歳を記念して内閣総理大臣から銀杯と共に贈られた祝状

次女から五女に 「愛知淑徳」と命名

愛知淑徳高等女学校が開学した頃、小林清作先生とご家族は東新町キャンパス近くの校長住宅に住んでいました。清作先生は四男五女の子どもに恵まれ、長女には自分の名前の「清」、二女から五女には学園名



愛知淑徳高等女学校第19回卒業生
(昭和2年度卒業)
田尾知子さん(旧姓:小林)

明治43年7月23日生まれ。現在100歳。
大正12年4月、14歳で愛知淑徳高等女学校入学。
在学中からテニス選手として、数々の素晴らしい成績を残し、
愛知淑徳高女のスポーツ黄金時代を牽引した。
高女卒業後、櫻欄女学園に入学。
昭和9年、田尾真一氏と結婚。三男一女に恵まれる。

「愛知淑徳」からそれぞれ一字を取って名付けました。当時の女学校のマークが「徳」だったので、まず最後の徳を取って「徳子」、次いで「淑子」「知子」「愛子」と命名。学園の輝かしい未来を暗示するかのような、連続四人の奇跡的な誕生でした。
知子さんは白壁高等小学校を卒業して、大正12年4月に愛知淑徳高等女学校に入学。開校して18年目を迎えていた高女は、女子教育は裁縫と家事だけで十分とされていた時代に、英語や理科を必修科目とし、スポーツに力を入れ、運動会や修学旅行を実施するなど、先進的な女子教育に取り組んでいました。保守的な良妻賢母型教育から、高い教養を備え、健康ではつらつとした女性の育成に尽力する、全国的にも進歩的な高等女学校だったのです。

「淑徳魂」でテニスに打ち込み、 全国大会で優勝



小林清作先生(前列右)、守田俊三先生とテニス部のユニフォームを着た選手たち。右から2人目が知子さん

知子さんも3年生の時に庭球部(軟式)に入ります。しかし思うように上達せず、嘆いていると、清作先生から「大選手になりたかったら普通のことをしてはだめだ。人が百本打つならお前は千本打ちなさい」と諭されました。
清作先生は学園の創立精神を「淑徳魂」という言葉で表現されています。「負けじ魂」と「労働をいとわぬ精神」です。先生からくじけることのない淑徳魂を吹き込まれた知子さんは、大正14年に高女へ赴任してきた庭球指導の神様と言われた守田俊三先生の猛練習に鍛えられ、庭球部の大将になります。

そして昭和2年と4年に明治神宮体育大会でシングルス優勝、6年には同大会で妹の愛子さんとペアを組みダブルス優勝など、数え切れないほどの華々しい成績を残し、「中京女子庭球界の花」と謳われるまでになりました。ほかの生徒の活躍もあり、「庭球淑徳」の名は全国にとどろきました。
この頃のことについて、清作先生の言行録「小林清作先生」で、6人の兄弟姉妹が振り返っています(左ページ写真参照)。
愛知県の高女で初めて洋装の制服を採用したのは大正9年。そのモデルとなったのは知子さんだったこと。清作先生は上の子どもたちには厳しかったが、下の子には甘かった。中でも知子さんを一番可愛がったこと。七本松にあったテニスクラブへの送り迎えをしたこと。テニスの試合で知子さんが地方へ遠征し、夜行で名古屋に戻ってくると、清作先生が駅まで迎えに来たこと、など。
知子さんはテニスだけでなく水泳にも秀で、全国大会にも出場しています。また書道にも長けており、こんな記録が残っています。
昭和2年11月15日、天皇陛下が名古屋に行幸された時、本学園は私学の代表として勅使の木下侍従を迎えました。理科や体育の授業の見学の後、勅使は展示してあった習字作品11点の中の1点に注目します。知子さんの書でした。清作先生が、「これを書いたのは、明治神宮体育大会の軟球シングルスに優勝した生徒です」と説明すると、勅使は「この習字を大本営まで届けられよ」。

小林清作先生系図

小林清作先生



左から徳子(次女)、重四郎(四男)、素三郎(三男)、愛子(五女)、淑子(三女)、知子(四女)。『小林清作先生』(昭和55年5月 愛知淑徳学園発行)より「現在の家族の回顧座談会」

愛知淑徳高等女学校と知子さんの歩み

- 1905 (明治 38) 愛知淑徳女学校開学
- 1906 (明治 39) 西新町から東新町に移転・愛知淑徳高等女学校開校
- 1907 (明治 40)
- 1908 (明治 41)
- 1909 (明治 42) 第1回修学旅行・第1回卒業式
- 1910 (明治 43) 知子さん誕生

- 1911 (明治 44)
- 1912 (明治 45・大 1)
- 1913 (大正 2)
- 1914 (大正 3) 第一次世界大戦勃発
- 1915 (大正 4)
- 1916 (大正 5)
- 1917 (大正 6)
- 1918 (大正 7)
- 1919 (大正 8) 東新町時代の校舎



東新町時代の校舎

- 1920 (大正 9) 制服に洋服を採用
- 1921 (大正 10)
- 1922 (大正 11)
- 1923 (大正 12) 関東大震災 愛知淑徳高等女学校入学
- 1924 (大正 13)
- 1925 (大正 14)

- 1926 (大 15・昭和 1)
- 1927 (昭和 2) 高女卒業～補習科入学
- 1928 (昭和 3) 補習科卒業～櫻菊女学園入学
- 1929 (昭和 4) 全日本選手権優勝(翌年も)
- 1930 (昭和 5) 極東オリンピック出場

- 1931 (昭和 6)
- 1932 (昭和 7)
- 1933 (昭和 8)
- 1934 (昭和 9)
- 1935 (昭和 10) 結婚

- 1936 (昭和 11) 小林清作先生逝去
- 1937 (昭和 12) 二・二六事件
- 1938 (昭和 13) 盧溝橋事件(日中戦争始まる)
- 1939 (昭和 14)
- 1940 (昭和 15) 太平洋戦争始まる
- 1941 (昭和 16)



池下時代の校舎



テニスの大会で手にした数多くのカップやトロフィー。しかし戦争末期の熊本で、夫が全て供出(政府が行っていた金属類の回収)に出してしまった。知子さんは、「惜しいとは思っていませんでした」(真理子さん)とのこと

陛下の展覧に供する」と告げられました。大変な名誉でした。

卒業後も人生を支え続けた「淑徳魂」

知子さんが高女を卒業したのは、校舎が池下に移転した年です。池下校舎はブルー、テニスコート3面、バレーとバスケットのコート各2面などを備え、恵まれた環境で実力を付けた生徒たちは、相次いで全国大会を制覇。オリンピックに出場した選手もあり、愛知淑徳はスポーツの黄金時代を迎えました。

高女卒業後、硬式に転向した知子さんは、女性では名古屋で唯一の



妹の愛子さん(右)と。テニスをしてきたのは、兄弟の中でもこの2人だけで、ダブルスを組んで全国大会で優勝したことも

入学。高女を卒業した名古屋の上層階級の令嬢たちが通った三年制の学校ですが、この間も知子さんはテニスを続けました。

ラケットを置いた

のは、三菱重工に勤務していた田尾真一さんと結婚した昭和9年。4人の子どもに恵まれますが、戦時色が強くなり熊本へ転勤。子育てから手が離れた50歳頃から再びラケットを握るようになり、昭和29年には熊本代表として国体に参加しています。その後、福岡、東京への転勤を経て、

昭和36年、名古屋近郊に移りました。姉妹の仲はよく、嫁ぎ先は離れていましたが、子どもたちが独立してからは、皆でよく旅行に出かけていました。また、夫の真一さんが17年前に亡くなるまで、知子さんと二人で仲よく出かけたそうで、「若い頃に運動をしたから、今も丈夫なのかもしれないですね」と娘の真理子さんは話してくれました。

百年という歳月には、戦争、家族の死など辛いことも多かったと思いますが。しかし清作先生の教えである「淑徳魂」を支えに一世紀をたくましく生き抜き、現在は穏やかな笑顔を見せる知子さんです。